



MINGEI: The Beauty of Everyday Things

2024 4/24^{wed.} - 6/30^{sun.}

プレスリリース

民藝

美は暮らしの
なかにある

MINGEI

世田谷美術館
SETAGAYA ART MUSEUM

[上から] 緑黒釉掛分皿 因幡牛ノ戸(鳥取) 1931年頃 / 流描皿 河井寛次郎 京都 1927-28年頃 /
藍鉄絵紅茶器 濱田庄司 栃木 1935年頃 / 食器棚 イギリス 19世紀
いずれも日本民藝館蔵 Photo: Yuki Ogawa

展覧会概要

| | |
|------|--|
| 展覧会名 | 民藝 MINGEI—美は暮らしのなかにある MINGEI: The Beauty of Everyday Things |
| 会期 | 2024年4月24日(水)–6月30日(日) |
| 会場 | 世田谷美術館 1、2F展示室 〒157-0075 世田谷区砧公園1-2 |
| 開場時間 | 10:00–18:00(入場は17:30まで) |
| 休館日 | 月曜日(ただし4/29(月・祝)、5/6(月・祝)は開館、5/7(火)は休館) |
| 料金 | 一般 1,700円ほか(予定) |
| 主催 | 世田谷美術館(公益財団法人せたがや文化財団)、朝日新聞社、東映 |
| 後援 | 世田谷区、世田谷区教育委員会 |
| 協賛 | TOPPAN |
| 特別協力 | 日本民藝館 |
| 協力 | 静岡市立芹沢銈介美術館、カトーレック |
| 監修 | 森谷美保(美術史家) |
| 監修協力 | 濱田琢司(関西学院大学文学部 教授) |

● チケット販売やイベント情報などの詳細は決定次第、展覧会公式サイトでお知らせします。

巡回情報

本展覧会は世田谷美術館に続いて、富山、愛知、福岡に巡回予定です。

企画趣旨

約100年前に思想家・柳宗悦が説いた民衆的工藝、「民藝」。日々の生活のなかにある美を慈しみ、素材や作り手に思いを寄せる、この「民藝」のコンセプトはいま改めて必要とされ、私たちの暮らしに身近なものとなりつつあります。本展では、民藝について「衣・食・住」をテーマにひも解き、暮らしで用いられてきた美しい民藝の品々約150件を展示します。また、いまに続く民藝の産地を訪ね、そこで働く作り手と、受け継がれている手仕事も紹介します。

さらには、2022年夏までセレクトショップBEAMSのディレクターとして長く活躍し、現在の民藝ブームに大きな役割を果たしてきたテリー・エリス／北村恵子(MOGI Folk Art ディレクター)による、現代のライフスタイルと民藝を融合したインスタレーションも見どころのひとつとなるでしょう。

柳が説いた生活のなかの美、民藝とは何か——そのひろがり今、そしてこれからを展望する展覧会です。



Photo: Yuki Ogawa

結び文座布団 芹沢銈介 静岡
1930年頃 個人蔵

みどころ

1 細やかな手仕事で施された刺し子の着物や、素朴な味わいにあふれる器など民藝の名品、約150件が集結

国内のみならず世界各地に目を向け、名も無き作り手たちが生み出す日用品にこそ「美」が宿る、と見出した柳宗悦の眼。本展では、柳らが集めた暮らしのなかにある美しい民藝の品々を中心に紹介し、「民藝ってなんだろ？」という初心者の方々にも親しみやすくご覧いただけます。文様の美しさだけでなく機能性も兼ね備えた江戸時代の刺し子の着物や、大胆な模様が印象的なアイヌの衣装、愛らしいイギリスのスリッパウェアの皿、フォルムの美しい芯切挟や手箒など、時代や地域も様々な名品が並びます。

2 民藝の「いま、そしてこれから」に迫る展覧会

柳の亡きあとも、民藝運動はひろがりを見せました。また、日本の各地でも伝統を受け継ぎ、現在でも新たな職人や手仕事の品が誕生しています。本展では、現在の民藝の作り手に注目し、小鹿田焼(大分)、丹波布(兵庫)、鳥越竹細工(岩手)、八尾和紙(富山)、倉敷ガラス(岡山)の5つの産地を紹介。現代作の展示とともに、現地を取材して制作した本展オリジナルの映像により、そこで働く人々の想いや制作風景を伝えます。

また、現在の民藝ブームの先駆者ともいえるテリー・エリス/北村恵子(MOGI Folk Artディレクター)によるインテリアの実例を、現代の生活に溶け込む「これからの民藝スタイル」としてインスタレーション展示します。

つくる人、つなぐ人、つかう人のコミュニケーションで続いていく、これからの民藝にも視点をひろげます。

3 展覧会特設ショップもお楽しみに

本展覧会の特設ショップでは、第III章で紹介する東京・高円寺のショップMOGI Folk Artが日本各地の作り手たちと交流して生み出した別注品の数々や、注目の染色家/アーティスト・宮入圭太氏が本展のためにデザインしたグッズ、そして各地のやきものやガラス、布、和紙、木工など、国内外の職人による民藝の品々を多数取り揃えます。

暮らしのなかに取り入れたい、民藝ならではの自然の素材や、人の手のぬくもりに、特設ショップでも出会うことができます。どうぞご期待ください。

柳宗悦と民藝運動

「民藝運動の父」と呼ばれる思想家・柳宗悦(1889-1961)。東京、麻布生まれ。1910年、雑誌『白樺』の創刊に参加。宗教哲学や西洋美術などに深い関心を持ち、1913年に東京帝国大学哲学科を卒業。その後、朝鮮陶磁、木喰仏の調査研究、収集を進めるなか、無名の職人が作る民衆の日用雑器の美に関心を抱いた。1925年には、その価値を人々に紹介しようと「民藝」という新語を作り、濱田庄司や河井寛次郎ら共鳴する仲間たちと民藝運動を創始する。1936年、日本民藝館を開設し、初代館長に就任。以後ここを拠点に、国内外各地への調査収集の旅、文筆活動や展覧会活動と、活発な運動を展開した。

[左から]
角酒瓶 小谷眞三 倉敷(岡山) 1979年/
酒瓶 小谷眞三 倉敷(岡山) 1985年頃/
栓付瓶 メキシコ 20世紀中頃
いずれも日本民藝館蔵



Photo: Yuki Ogawa

第Ⅰ章

1941 生活展

—柳宗悦によるライフスタイル提案

第Ⅱ章

暮らしのなかの民藝

—美しいデザイン

第Ⅲ章

ひろがる民藝

—これまでとこれから



日本民藝館「生活展」会場写真 1941年

MINJEI

第Ⅰ章

1941生活展—柳宗悦によるライフスタイル提案

1941(昭和16)年、柳宗悦は自身が設立した日本民藝館(東京・目黒)で「生活展」を展開。民藝の品々で室内を装飾し、いまでいうテーブルコーディネートを表示しました。暮らしのなかで民藝を活かす手法を提示した、モデルルームのような展示は当時珍しく、画期的でした。

第Ⅰ章では「生活展」の再現を試み、実際に出品された作品を中心に、柳が説いた暮らしの美を紹介します。



藍鉄絵紅茶器

濱田庄司 栃木 1935年頃 日本民藝館蔵

笹の葉の文様が描かれた濱田庄司の紅茶器セットは、柳宗悦が自宅で愛用したもの。ティーポットは日本の土瓶の形状を採用しており、日本家屋の室内で用いるのに相応しい姿を見せる。

チャイルズ・スクロールバック・アームチェア

イギリス 19世紀 日本民藝館蔵

1929年に柳宗悦と濱田庄司がイギリスから持ち帰ったウィンザーチェアのひとつ。テーブルと椅子を使う暮らしの伝統がない日本において、柳が優れた椅子として使用したのは、イギリスの椅子が中心であった。



第II章

暮らしのなかの民藝——美しいデザイン

第I章

1941 生活展

——柳宗悦によるライフスタイル提案

第II章

暮らしのなかの民藝

——美しいデザイン

第III章

ひろがる民藝

——これまでとこれから

柳宗悦は、陶磁、染織、木工などあらゆる工芸品のほか、絵画や家具調度など多岐にわたる品々を、日本のみならず朝鮮半島の各所、中国や欧米などへ旅し、収集を重ねました。時代も古くは縄文時代から、柳らが民藝運動を活発化させた昭和にいたるまでと幅広く、とりわけ同時代の、国内各地で作られた手仕事の日常品に着目し、それらを積極的に紹介しました。

第II章では民藝の品々を「衣・食・住」に分類し、それぞれに民藝美を見出した柳の視点をひも解きます。

刺子稽古着(部分) 江戸時代 18-19世紀 日本民藝館蔵

東京会場
より
展示予定



衣

Photo: Yuki Ogawa

MINJEI

II——①「衣」を装う

“只被る為なら美しさ等どうでもいい。だが美しさは着たい気持ちをそそる。”

——柳宗悦「用と美」1941年



東京会場
より
展示予定

屋号入革羽織

江戸時代 19世紀

静岡市立芹沢銈介美術館蔵

火消しや大工などが着用したものとされる。背には井桁に「加」の字。裾に回した模様は漢字と思われるが、日本ならではの粋な感覚がある。

(上から)

流描指輪 (2点)

河井寛次郎(細工:増田三男)
京都 1930-40年代

赤漆彫卍文帯留(右)

黒田辰秋 京都 1930年頃

銀象嵌赤漆花字帯留(左)

青田七良 京都 1930年頃

色絵五弁花模様帯留

富本憲吉(細工:増田三男)
東京 1931年

染付更紗模様帯留

富本憲吉(細工:増田三男)
東京 1931年

個人蔵



Photo: Yuki Ogawa

最初期の民藝運動に大きな影響を与えた高林兵衛の旧蔵品で、夫人や娘たちが愛用したものだという。

民藝

美は暮らしの
なかにある

第I章

1941 生活展

—柳宗悦によるライフスタイル提案

第II章

暮らしのなかの民藝

—美しいデザイン

第III章

ひろがる民藝

—これまでとこれから

厚司(アットウシ)

アイヌ(北海道) 19世紀
静岡市立芹沢銈介美術館蔵

アットウシは、オヒヨウ、ハルニレなどの樹木の皮をはぎ、その繊維で織り出した樹皮布。模様は一見してアイヌと分かる強い個性を放っている。



東京会場
より
展示予定



波に鶴文夜着

江戸～明治時代 19世紀
静岡市立芹沢銈介美術館蔵

夜着とは着物の形をした夜具のこと。躍動感あふれる鶴と波を描きながら、着物の形にぴったりと納め、藍の濃淡ですっきりと表現している。優れた意匠と熟練の技が噛み合った作品。

東京会場
より
展示予定

MIN GEEI

食

II — ②「食」を彩る

“人間は美味を好む。だが料理だけに止めるのではない。それを綺麗に皿に盛る。その皿さへも選擇する。”

—柳宗悦「用と美」1941年

網袋(鶏卵入れ)

朝鮮半島 20世紀初頭
日本民藝館蔵

藁編みの籠の中心に開いた窓から卵を入れるという、朝鮮の鶏卵入れ。上部の紐で吊るして、保管できるように作られている。



スリップウェア角皿

イギリス 18世紀後半-19世紀後半
日本民藝館蔵

現代でも人気が高いイギリスのスリップウェアも、民藝同人らが日本に広めたやきもののひとつ。本作は柳旧蔵のスリップウェアの優品で、数多く作られたパイ皿。

塗分盆

江戸時代 18世紀
日本民藝館蔵

Photo: Yuki Ogawa

第I章

1941 生活展

—柳宗悦によるライフスタイル提案

第II章

暮らしのなかの民藝

—美しいデザイン

第III章

ひろがる民藝

—これまでとこれから



桐文行燈 江戸時代後期 個人蔵

住

II——③「住」を飾る

“暮らしは色々なものを招く。それに応じて適宜な材料が選ばれ、適当な形が整えられる。”

—柳宗悦「用と美」1941年

MINJEI



(左上から時計回りに)

手箒

仙台郡山(宮城) 1939年頃

鹿沼箒

下野鹿沼(栃木) 1939年頃

手箒

信州(長野) 1939年頃

いずれも日本民藝館蔵



芯切鋏

京都 1920年代後半-1930年代前半
日本民藝館蔵

昭和戦前期の京都で作られていた、和蠟燭の芯を切るための仏具用鋏。切り取った芯が落ちないような造りや、握りやすさを考慮した柄など、機能性もよく考えられている。



色絵猪文タイル

オランダ 16-17世紀 日本民藝館蔵



円座

朝鮮半島 1930年代

日本民藝館蔵

柳宗悦、河井寛次郎、濱田庄司の3人は、1936年、1937年と2年連続で朝鮮を旅し、当時朝鮮で作られていた日用品を購入した。これは模様として文字が編み込まれた座布団代わりの敷物・円座。



椅子

オーストリア 19世紀初頭
静岡市立芹沢銈介美術館蔵
(出品予定)

第Ⅰ章

1941 生活展

—柳宗悦によるライフスタイル提案

第Ⅱ章

暮らしのなかの民藝

—美しいデザイン

第Ⅲ章

ひろがる民藝

—これまでとこれから

気候風土が育んだ暮らし——沖縄

本土から遠く離れた沖縄は、古い歴史を持ち、独自の文化、風習を育んできました。第Ⅱ章最後では、柳が「奇跡」と称えた沖縄の民藝に焦点をあて、紅型、織物、陶器、漆器などにより、かつての沖縄の豊かな暮らしを顧みます。



芭蕉布縞着物

沖縄 19-20世紀前半
静岡市立芹沢銈介美術館蔵

東京会場
より
展示予定



クバ団扇

沖縄 1950-60年代 日本民藝館蔵

流水に桜河骨文紅型着物

沖縄 19-20世紀前半

静岡市立芹沢銈介美術館蔵

紅型は、南国らしい色鮮やかな沖縄の様式である。模様のお多くは、日本本土からの影響が強いが、季節感がなく、四季の模様が自由に取り込まれているところに特徴がある。芹沢銈介は、沖縄の紅型に出会って夢中になり、染色家としての道を歩み始めた。



東京会場
より
展示予定



第Ⅰ章

1941 生活展

— 柳宗悦によるライフスタイル提案

第Ⅱ章

暮らしのなかの民藝

— 美しいデザイン

第Ⅲ章

ひろがる民藝

— これまでとこれから



双魚文上着裂(モラ)(部分) サンブラス島(パナマ)
20世紀後半 静岡市芹沢銈介美術館蔵
(出品予定)

第Ⅲ章

ひろがる民藝 — これまでとこれから

柳宗悦の没後も民藝運動は広がりを見せました。濱田庄司、芹沢銈介、外村吉之介が1972(昭和47)年に刊行した書籍『世界の民芸』では、欧州各国、南米、アフリカなど世界各国の品々を紹介。各地の気候風土、生活に育まれたプリミティブなデザインは民藝の新たな扉を開きました。

一方、民藝運動により注目を集めた日本各地の工芸の産地でも、伝統を受け継いだ新たな製品、新しい世代の職人たちが誕生しています。本展では国内5つの産地から、これまでと現在作られている民藝の品々や、そこで働く人々の“いま”を紹介します。

そして、本章最後では、現在の民藝ブームの先駆者ともいえるテリー・エリス／北村恵子(MOGI Folk Art ディレクター)の愛蔵品や、世界各地で見つけたフォークアートが“いま”の暮らしに融合した「これからの民藝スタイル」を、インスタレーション展示で提案します。

Ⅲ — ① 『世界の民芸』 — 新たな民藝の世界

[左から] 濱田庄司、
外村吉之介『世界の民芸』
朝日新聞社 1972年 個人蔵／
靴下 アゼルバイジャン地方
(イラン) 20世紀後半
静岡市立芹沢銈介美術館蔵
(出品予定)／
人形 フニン県ワンカヨ(ペルー)
20世紀後半
静岡市立芹沢銈介美術館蔵
(出品予定)



Photo: Yuki Ogawa



第Ⅰ章

1941 生活展

— 柳宗悦によるライフスタイル提案

第Ⅱ章

暮らしのなかの民藝

— 美しいデザイン

第Ⅲ章

ひろがる「民藝」

— これまでとこれから

Ⅲ — ② 民藝の産地 — 作り手といま

昭和戦後期以降の日本のものづくりは機械での生産が主流となりますが、伝統を失わずに手仕事を続ける産地、失われた手わざの復活を試みる職人、新たな民藝を創作する人々が登場します。本展では5つの産地に焦点を当て、かつての品物と現代の製品、そこで働く人々のいまを紹介します。

小鹿田焼

おんたやき
大分県

江戸時代中期から続くやきもの里。川の水流の力で地元の土を搗き、地形を活かした登り窯で焼く。一子相伝の窯に伝わる、日常使いの器たち。



Photo: Yuki Ogawa

丹波布

たんぼぬの
兵庫県

手紡ぎの糸を草木で染め、絹のつまみ糸を織り込む手織の布。江戸末期にはじまり一度は廃れるも戦後復興し、現代の作り手へと引き継がれる。

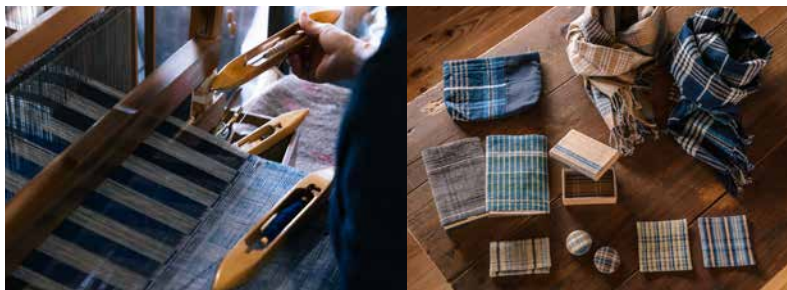


Photo: Yuki Ogawa

鳥越竹細工

とりこえたけざいく
岩手県

数多い産地のなかでも柳が好んだ、寒冷の地の細くしなやかな原料でつくる繊細な竹細工。一方で、現在は素材調達の危機という局面をむかえている。



Photo: Yuki Ogawa

八尾和紙

やつおわし
富山県

もとは薬売りの包み紙として発展した八尾和紙。現在、八尾で唯一和紙作りを続ける桂樹舎は、芹沢銈介の影響による色鮮やかな型染和紙に今も新しい試みを重ねる。



Photo: Yuki Ogawa

倉敷ガラス

くらしきがらす
岡山県

ガラス職人の小谷真三が、民藝運動の関係者らの勧めではじめた日常使いのぬくもり溢れるガラス器。現在は二代目の工房に引き継がれる。



Photo: Yuki Ogawa

MINJEI

GEI

第Ⅰ章

1941 生活展

— 柳宗悦によるライフスタイル提案

第Ⅱ章

暮らしのなかの民藝

— 美しいデザイン

第Ⅲ章

ひろがる民藝

— これまでとこれから

Mixed MINGEI Style by MOGI

第Ⅲ章最後では、現在の民藝ブームを牽引する存在として活躍するテリー・エリス／北村恵子(MOGI Folk Art ディレクター)による、現代のライフスタイルと民藝を融合したインスタレーションを展開します。



テリー・エリス／北村恵子
(MOGI Folk Art ディレクター)自邸



Photo: Yuki Ogawa

MOGI Folk Art

モギフォークアート

東京・高円寺でMOGI Folk Artを主宰するテリー・エリスと北村恵子は、セレクトショップ BEAMSのバイヤーとして活躍していた1990年代から、民藝運動とも関わりの深い日本の手工芸品を、服飾や北欧インテリアと組み合わせて紹介してきました。2003年にBEAMS内のレーベル「fennica」を立ち上げ、2022年には自身のショップMOGI Folk Artを新たにオープン。現在に至るまで「デザインとクラフトの橋渡し」をテーマに、国内の産地を回って見出したトラディショナルな民藝・工芸の品々を現代の暮らしに取り入れることでもたらされる豊かさを提案しています。作り手との交流を通じて、伝統的な技法やモチーフを活かしたオリジナルの別注品も数多く生み出しています。



MOGI Folk Art ディレクターのテリー・エリスと北村恵子

Photo: Yuki Ogawa

MIN
GEI

展覧会公式サイト

<https://mingei-kurashi.exhibit.jp/>

展覧会公式SNS



アクセス

世田谷美術館 SETAGAYA ART MUSEUM

〒157-0075 世田谷区砧公園 1-2 TEL 03-3415-6011 (代表)

<https://www.setagayaartmuseum.or.jp/>

東急田園都市線「用賀」駅下車、北口から
徒歩17分、または美術館行バス「美術館」**A**
下車徒歩3分

小田急線「成城学園前」駅下車、南口から
渋谷駅行バス「砧町」**B**下車徒歩10分

小田急線「千歳船橋」駅下車、田園調布駅行
バス「美術館入口」**C**下車徒歩5分

来館者専用駐車場(60台、無料)：
東名高速道路高架下、厚木方面側道400m先。
美術館まで徒歩5分



お問合せ

展覧会のご案内：050-5541-8600 (ハローダイヤル)

報道関係者
お問合せ先

『民藝 MINGEI — 美は暮らしのなかにある』広報事務局 (ユース・プランニング センター内)
担当：片山・池袋

E-mail mingei-tokyo@ypcpr.com

TEL 03-6821-8126 FAX 03-6821-8869

住所 〒150-8551 東京都渋谷区桜丘町9-8KN 渋谷3ビル4F

























左上から時計回りに：
[左から] 角酒瓶 小谷眞三 倉敷(岡山) 1979年 / 酒瓶 小谷眞三 倉敷(岡山) 1985年頃 / 栓付瓶
メキシコ 20世紀中頃 いずれも日本民藝館蔵、八尾和紙(富山)、[上から] 竹行李 陸中鳥越(岩手)
1930年代 / 刺子足袋 羽前庄内(山形) 1940年頃 いずれも日本民藝館蔵、鳥越竹細工(岩手)
Photo: Yuki Ogawa

「民藝 MINGEI—美は暮らしのなかにある」広報画像申請用紙

【会場:世田谷美術館 会期:2024年4月24日(水)~6月30日(日)】

<画像使用に際しての注意>

- 本展覧会広報目的での使用に限ります。使用可能期間は本展覧会期終了までとなります。使用後はデータの破棄をお願いいたします。ただし、本展のレビュー記事についてはこの限りではありません。
- 画像の二次使用はご遠慮ください。
- 展覧会名、会期・会場名のほか、画像の使用時には次ページの画像クレジットを必ずご掲載ください。
- 作品画像は全図でご使用ください。トリミングや文字を重ねるなど画像の加工・改変はご遠慮ください。
- 概要など確認のため、ゲラ刷り・原稿の段階で本展覧会広報事務局までお送りいただきますようお願いいたします。
- 掲載・放送後は、お手数ですが、掲載誌・同録 DVD を広報事務局へ1部ご送付願います。
- 下記広報画像のほかに、世田谷美術館の外観写真もご提供可能です。ご希望の方は広報事務局までお知らせください。

| | | | | |
|---|--|--|---|---|
| <p>1. 展覧会キービジュアル</p> <p>縦</p>  <p>横 1</p>  <p>横 2</p>  | <p>2. スリップウェア鶏文鉢</p>  | <p>3. 竹行李／刺子足袋</p>  | <p>4. 緑黒釉掛分皿ほか</p>  | <p>5. 角酒瓶／酒瓶／栓付瓶</p>  |
| <p>6. 日本民藝館「生活展」 会場写真</p>  | <p>7. チャイルズ・スクロール バック・アームチェア</p>  | <p>8. 流描指輪ほか</p>  | <p>9. 波に鶴文夜着</p>  | <p>10. 厚司(アットウシ)</p>  |
| <p>11. 刺子稽古着</p>  | <p>12. 流水に桜河骨文紅型着物</p>  | <p>13. スリップウェア角皿</p>  | <p>14. 網袋(鶏卵入れ)</p>  | <p>15. 塗分盆ほか</p>  |
| <p>16. 緑黒釉掛分皿</p>  | <p>17. 小鹿田焼(大分) 現代作</p>  | <p>18. 八尾和紙(富山) 製作風景</p>  | <p>19. MOGI Folk Art デイクター のデリー・エリスと北村恵子</p>  | <p>20. 柳宗悦 1936 年撮影</p>  |

「民藝 MINGEI—美は暮らしのなかにある」広報事務局行
FAX: 03-6821-8869 E-mail:mingei-tokyo@ypcpr.com

画像(JPEG)はメールで送信いたします。

広報用画像使用の際は、以下のクレジットを必ずご掲載ください。作品の展示・期間は変更となる可能性がございます。

■ 広報画像(ご希望の画像にチェックを入れてください。)

| ✓ | No. | 【ご掲載時に必要なクレジット表記】 |
|--------------------------|------------|---|
| <input type="checkbox"/> | 1-1 | 展覧会キービジュアル(縦) ※クレジット不要 |
| <input type="checkbox"/> | 1-2 1-3 | 展覧会キービジュアル(横1/横2) ※クレジット不要 |
| <input type="checkbox"/> | 2 | スリップウェア鶏文鉢 イギリス 18 世紀後半 日本民藝館蔵 Photo: Yuki Ogawa |
| <input type="checkbox"/> | 3 | (上から)竹行李 陸中鳥越(岩手) 1930 年代/刺子足袋 羽前庄内(山形) 1940 年頃 いずれも日本民藝館蔵 Photo: Yuki Ogawa |
| <input type="checkbox"/> | 4 | (上から)緑黒釉掛分皿 因幡牛ノ戸(鳥取) 1931 年頃/流描皿 河井寛次郎 京都 1927-28 年頃/藍鉄絵紅 茶器 濱田庄司 栃木 1935 年頃/食器棚 イギリス 19 世紀 いずれも日本民藝館蔵 Photo: Yuki Ogawa |
| <input type="checkbox"/> | 5 | (左から)角酒瓶 小谷眞三 倉敷(岡山) 1979 年/酒瓶 小谷眞三 倉敷(岡山) 1985 年頃/ 栓付瓶 メキシコ 20 世紀中頃 いずれも日本民藝館蔵 Photo: Yuki Ogawa |
| <input type="checkbox"/> | 6 | 日本民藝館「生活展」会場写真 1941 年 |
| <input type="checkbox"/> | 7 | チャイルズ・スクロールバック・アームチェア イギリス 19 世紀 日本民藝館蔵 |
| <input type="checkbox"/> | 8 | (上から)流描指輪(2点) 河井寛次郎(細工:増田三男) 京都 1930-40 年代/赤漆彫卍文帯留(右) 黒田辰秋 京都 1930 年頃/銀象嵌赤漆花字帯留(左) 青田七良 京都 1930 年頃/色絵五弁花模様帯留 富本憲吉(細 工:増田三男) 東京 1931 年/染付更紗模様帯留 富本憲吉(細工:増田三男) 東京 1931 年 いずれも個人蔵 Photo: Yuki Ogawa |
| <input type="checkbox"/> | 9 | 波に鶴文夜着 江戸~明治時代 19 世紀 静岡市立芹沢銈介美術館蔵 |
| <input type="checkbox"/> | 10 | 厚司(アットウシ) アイヌ(北海道) 19 世紀 静岡市立芹沢銈介美術館蔵 |
| <input type="checkbox"/> | 11 | 刺子稽古着 江戸時代 18-19 世紀 日本民藝館蔵 |
| <input type="checkbox"/> | 12 | 流水に桜河骨文紅型着物 首里(沖縄) 19-20 世紀前半 静岡市立芹沢銈介美術館蔵 |
| <input type="checkbox"/> | 13 | スリップウェア角皿 イギリス 18 世紀後半-19 世紀後半 日本民藝館蔵 Photo: Yuki Ogawa |
| <input type="checkbox"/> | 14 | 網袋(鶏卵入れ) 朝鮮半島 20 世紀初頭 日本民藝館蔵 |
| <input type="checkbox"/> | 15 | (手前)塗分盆 江戸時代 18 世紀/(盆上左から)染付羊歯文湯呑、染付蝙蝠文湯呑、染付雨降文猪口 肥前有 田(佐賀) 江戸時代 18-19 世紀 いずれも日本民藝館蔵 Photo: Yuki Ogawa |
| <input type="checkbox"/> | 16 | 緑黒釉掛分皿 因幡牛ノ戸(鳥取) 1931 年頃 日本民藝館蔵 Photo: Yuki Ogawa |
| <input type="checkbox"/> | 17 | 小鹿田焼(大分、現代作:坂本工窯、坂本浩二窯) Photo: Yuki Ogawa |
| <input type="checkbox"/> | 18 | 八尾和紙(富山、製作風景:桂樹舎) Photo: Yuki Ogawa |
| <input type="checkbox"/> | 19 | MOGI Folk Art ディレクターのテリー・エリスと北村恵子 Photo: Yuki Ogawa |
| <input type="checkbox"/> | 20 | 柳宗悦 1936 年撮影 ©朝日新聞社 |

■ 貴媒体についてお知らせください。

| | | | |
|-------------------------------|-----------------------|-------------------------------|--------------------------------|
| 貴社名: | | | |
| 媒体名: | 掲載コーナー、特集名() | | |
| ※WEB 掲載を予定している場合はチェックをお願いします。 | コピーガード対応 | 可 | 不可 |
| 掲載月号: | 月 | 日 | 発売 (号) / 発行部数 部 |
| ご担当者名: | | | E-mail: |
| 連絡先: | 電話: | FAX: | |
| チケット希望: | 読者プレゼントとして 5 組 10 名分を | <input type="checkbox"/> 希望する | <input type="checkbox"/> 希望しない |
| チケット送付先: | 〒 | | |

報道関係の方からの本件に関するお問合せ先
「民藝 MINGEI—美は暮らしのなかにある」広報事務局(ユース・プランニング センター内) 担当:池袋・片山
〒150-8551 東京都渋谷区桜丘町 9-8 KN 渋谷 3 ビル 4F
TEL:03-6821-8126 FAX:03-6821-8869 E-mail:mingei-tokyo@ypcpr.com